

アコーディオンとブラス「風のアンサンブル」と気仙沼支援、 そしてS.フッキング ミュージアム・コンサート

川口 裕志

慌ただしい年の暮れ 12月16日（金）。ヴィータマンズリーコンサート 12月例会に推薦を受けて開催したアコーディオンとブラス「風のアンサンブル」は、多摩市民をはじめ府中、調布、八王子、日野、稲城など近郊の南多摩地域からたくさんの聴衆が駆けつけて会場を埋めた。主催のヴィータマンズリーコンサート実行委員会（多摩市民で構成）とヴィータホールは、出演者らを含め、その数 230 名と公表した。このシリーズの集客としては久々のヒット。初めて聴くアコーディオンのソロ（松村有子：Dark Eyes ジャズバージョン／倉田美穂：森の小鳥<ベトナム曲>）やブラスとのコラボレーションによるアンサンブル、オーケストラを聴衆は堪能し、2拍子の拍手によるカーテンコールで「アフリカン・シンフォニー」を再び演奏した。この日集まった東日本大震災復興支援募金は 15 万円、アコーディオン2台を気仙沼の被災地の託児所に送ることとなった。

このヴィータマンズリーコンサートは、多摩市民に無料で様々なジャンルの音楽を聞かせようとの意図で、プロ、アマを問わず出演者を広く公募し、年間 6 団体（過去には毎月 1 団体）を推薦して十数年開催してきた。昨年 2 月に申請していたものだが、あいにくの大震災により半年間の休止。10 月再開後、12 月に出演をとの慌ただしい要請。

三多摩地域のアコーディオン団体とブラスの仲間で急遽結成された運営委員会が活動を開始。そこで 3 つの目標をもった。

1. 多摩市民にアコーディオンとブラスの魅力をってもらう。（多摩市でのアコーディオンのホールコンサートはかつてほとんどなかった）
2. アコーディオンとブラスのコラボとして広く出演を呼び掛ける。
3. 募金活動については、当コンサ会場で東日本大震災復興支援募金を呼び掛ける。

そして何よりもこのマンズリーコンサートの意図である「市民によい音楽を提供する」ことを第一義におき、成功のため努力することを確認した。

復興支援募金については、マンズリーコンサートでは初めてのケースとのこと。ホールサイドの許可に不安があったが、事態が事態、ということで条件付きの許可が下りた。趣旨に共感したある音楽家が「ぜひ募金したい」と 2 万円を提供したり、「何か協力させて」と申し出たアルビレオ（2010 年 N H K 熱血オヤジバトル東日本ブロック大会ベストプレイヤー賞受賞のボーカルグループ）のいわされいこさんが復興支援を訴えたフィナーレに共演し



フィナーレで「故郷」を歌ういわささん

「ふるさと」を熱唱したりと、思わぬ協力と出会いがあった。「一人ひとりの関係者の方が、一心に、ひたむきに取り組んでいらっしゃるこの風のアンサンブルコンサート。リハーサルから本番まで、本当に感動の連続でした」と語ったいわささんのことは、「音楽を通して被災された方々のために活動できたことを嬉しく思います」(トランペット)という感想とともに、50 人を超える当日の演奏者、スタッフの共通の心情であった。



気仙沼の被災地へ

年明けの2月半ば、いよいよ気仙沼被災地訪問の時が来た。「何かしなければ」「何か出来ることは」……メンバーの募る気持ちが行動に向かわせた。そこには参加の割当てや指命があるわけでもなく、本当に各団体から自然と人が集まった。現地のコーディネーターを見つけ、訪問先や宿泊の手配、行動スケジュールなどを組んでいただいて、足掛け3日間の日程が決まった。

初日。10人乗りのワンボックスカーをレンタルし、9人の訪問メンバーとアコーディオン、支援物品を積んでの暗夜走行。悪しくも東京では雪が舞っていた。運転手は一人、わず

かな仮眠と休憩で走ること12時間。深夜には零下7度まで気温が下がっていた。

現地に着いてまず目にしたのは土台だけ残して全て流された街並みと、海から押し流されて丘に登った400トンのどでかい漁船。

気仙沼は宮城県と岩手県の境目にあり、リアス式海岸で知られる三陸海岸の南部に位置して、世界三大漁場の一つといわれる三陸沖を抱え、水揚げ東北一を誇る漁業の街だ。その海岸線を北に進むと陸前高田、大船渡、釜石（いずれも岩手県）と続き、南に進むと南三陸町、女川町、石巻（いずれも宮城県）となる。

いずれの街も今回の大津波で大打撃を受けたばかりであるが、とりわけ気仙沼は地震、津波、火災と三重の恐怖を味わった街だ。地盤沈下で80cm沈んだ土地を、津波にも堪えられる土地にするためには6mの盛り土が必要という。しかも気仙沼だけでない、三陸一帯の広大な海辺の土地。ほほを突き刺す海風にさらされながら岬にたち、全てさらわれて何もなくなった、この漁港の広大な町並みをどう復興させるかを思った時、呆然として言葉もなかった。

私たちが行った支援先のひとつは気仙沼第二保育所。ここは高台にあり避難場所となったが、津波の直接の被害は受けていない。震災時、園にいた児は皆無事であったが、

支援物資品目

- アコーディオン 2台（箱ケース付き）
- 同 付属品（腰バンド）
- 教材（アコーディオン練習曲集1&2、他）
- アコーディオンとプラス「風のアンサンブル」DVDとプログラム、ニュース
- 打楽器類（トークドラム、キッズドラム、シェイカー、リコーダー数種など）
- 他（フォトスキャナ、毛布など）

離れていた児がやられたという。元気な子どもたちの前で 30 分くらいの演奏をし、アコーディオンや打楽器をプレゼント。若い保育士さんにアコーディオンやドラムの弾き方の手ほどきをした。

二カ所目はキッズ“おひさま”託児所。もとは南気仙沼幼稚園であったが建物もろとも流され何も残らなかった。職員の機転で全員無事。しかしここでも登園していなかった子がやられている。どちらも危機管理がしっかりしていたということであるが、そのことは保育に関しては被災地全体に危機管理の確かさが証明されているとのこと。ここでも演奏と楽器をプレゼントした。初め元気がない。しかし乗り始めると興奮し、歌に合わせて氣勢をあげた。しかし、今は子どもを預かるだけの施設となり、職員 3 人でなんと 40 人あまりを看ているという。考えただけでもぞっとする過酷な環境なのだ。

被災地の完全な復旧、復興にはこの先 10 年、20 年とかかるだろう。原発の問題はなお深刻だ。原発の利益にあやかる勢力がいる限り簡単ではない。微力ながら息の長い支援活動を続けていかねばならない。一同、そんな想いを胸にして家路に向かった。



ミュージアム・コンサート シュテファン・フツソング～現代美術と音楽が出会うとき

東京・春・音楽祭-東京のオペラの森 2012-が上野の森で開かれた。大震災で昨年、中止になっていたものだ。美術館、博物館、文化会館など全ての施設を開放してクラシック音楽を 3 週間あまりにわたって一斉に奏でるという企画。100 人を超えるソリストと、いくつかのオーケストラ、アンサンブル、合唱団が参加している。唯一アコーディオン出場のミュージアム・コンサートは上野の森美術館で絵画展を前にシュテファン・フツソングのソロで進められた。アコーディオンの現代作品(ティエンス、ヘルツキー、原田敬子)、ストラビンスキー、ジョン・ケージの 20 世紀の作曲家に加え、J. S. バッハのコラールの幾つかを演奏した。

フィナーレは J. S. バッハのコラール前奏曲「深き悩みの淵より、われ汝に呼ばれる」BWV687 とグバイドゥーリナのデ・プロフンディス(深き淵より)。この 2 曲があたかも一つの曲の様に間を開けずに演奏された。「深き淵より」という言葉は旧約聖書の詩篇に現れ、「死者の典礼」に使われる。つまりお葬式。フツソングが東日本大震災の犠牲者に追悼の気持ちをこめて演奏したことは疑いない。



シュテファン・フツソングを囲んで